日本剣道形

目 次

講習会資料「日本剣道形」作成の大綱	86
「日本剣道形」講習における〔重点事項〕	87
「日本剣道形」立会前の作法、掛声、刀	88
打太刀、仕太刀、刀を掲げ、立礼をして始める	90
太刀の形 七本	
一本目	92
二本目	94
三本目	96
四本目	98
五本目	100
六本目	102
七本目	104
太刀の形から小太刀の形へ移る場合の所作	104
小太刀の形 三本	
一本目	106
二本目	108
三本目	110
立会後の作法	110

剣道講習会資料「日本剣道形」作成の大綱

1. 日本剣道形の修練を通じて、剣道の原点である剣の理法を学び、剣道の正しい普及発展に役立てることを目的とした。
2. 『大日本帝國剣道形 増補加註寫眞説明（原本）』
昭和8年5月 大日本武徳會本部
『日本剣道形解説書』昭和56年12月7日 財団法人 全日本剣道連盟
『剣道講習会資料「日本剣道形」平成14年度版』
平成14年4月 財団法人 全日本剣道連盟
等の資料に基づいて全剣連が指導する日本剣道形について十分理解できるように集約した内容の『講習会資料「日本剣道形」』を作成した。
3. これまで実施してきた日本剣道形の内容を変更することなく、上記の資料にできる限り忠実に記述し、また明確にされていなかった点について、新たに剣道形部会で合意が得られたものについて明記した。
4. 手順及び補足説明の記述については、以下のようにした。
 - 1) 学ぶ者が理解し易いように打太刀と仕太刀それぞれの動作を分けて記述し、同じ動作のところについては共通記述とした。
 - 2) 学ぶ者にわかり易く、基本的な手順を□の枠内に入れて記述した。
 - 3) 習熟度に応じて、より高度な内容を修得できるように、打太刀と仕太刀の動作を分けて補足説明とした。
 - 4) 体をさばく方向、刃先の方向などの前後左右については、動作する者を基準として記述した。
 - 5) 打突、足さばきなどの動作については、すべてその表記方法を統一して記述し、補足説明の中では従来行われていた表記方法を原則とした。
 - 6) 常用漢字に使われていない漢字は剣道用語として学ぶために振り仮名をつけて残し、間違え易い用語についても振り仮名をつけた。
 - 7) 掛声の時機を明記した。
 - 8) 打太刀・仕太刀の動作について、○数字（例えば①、③など）は時間の流れを示した。
5. 今後、この剣道講習会資料「日本剣道形」は、更に研究した結果、（原本の趣旨を尊重し、改正することなく）問題点があれば修正することもあり得る。

日本剣道形講習における

[重点事項]

日本剣道形を正しく継承し、次代に伝えることは大きな意義がある。

『講習会資料「日本剣道形」作成の大綱』の目的を十分に理解し、平素から日本剣道形の修錬に努める必要がある。

下記に留意し、習熟度に応じて、より深く高度な形を修得し、指導することが大切である。

記

1. 立会前後の作法、立会の所作、刀の取り扱い。
2. 正しい刀（木刀）の操作（刃筋、手の内、鎧の使い方、一拍子の打突など）や体さばき。
3. 打太刀、仕太刀の関係を理解し、呼吸を合わせ、原則として仕太刀が打太刀より先に動作を起こさないこと。
4. 打太刀は間合に接したとき、機を捉えて打突部位を正しく打突し、仕太刀は勝機を逃すことなく打突部で打突部位を正確に打突すること。
5. 形の実施中は、目付け、呼吸法、残心などを心得て、気分を緩めることなく終始充実した気迫で行うこと。

日本剣道形

立会前の作法

打太刀

仕太刀

① 中央下座^{しもぎ}で互いに座礼をする。

② 立ち上がり、刀を右手に提げ、立会の間合^{まあい}に進む。

かけ
掛

ごえ
声

打太刀

仕太刀

① 「ヤー」の掛声とする。

① 「トー」の掛声とする。

刀

① 正式には刀（刃引^{はびき}）を用いる。

② 練習には木刀を用いる。

補足説明

①ア. 刀（木刀）を右手に提げ、仕太刀は打太刀にしたがって入場し、中央下座約三歩の距離で向い合って正座する。刀を右脇に、刃部を内側に、鐙を膝頭の線にそろえて置き、互いに座礼をする。

イ. 刀の持ち方は、右手の親指と人指し指で小太刀を持ち、人指し指の右側と残りの三指で太刀を持つ。二刀は平行に持つようにする。

ウ. 座礼の位置は、特に限定しないが、中央下座が望ましい。打太刀、仕太刀の位置については、必ずしも打太刀を上座に向かって右側にしなくても良い。

エ. 左足を約半歩ひき、左膝、右膝の順について座る。（左座右起）

オ. 小太刀は、太刀の内側に置く。丁重に取り扱うため左手を添えてもよい。

カ. 礼をするとき、両手は同時につく。

②ア. 右足、左足の順で立ち上がる。

イ. 刀は刃部を上、柄を前に、切先を後ろ下がりにして右手に提げ、立会の間合に進む（このとき、仕太刀は小太刀を置いて後、立会の間合に進む）。

ウ. 立会の間合は、およそ九歩とする。

エ. 小太刀を置く位置は、仕太刀の立会の位置から右（左）後方約五歩のところに刃部を内側にし、下座側の膝をつき、演武者と平行に置く。

②ア. 総尺 太刀約102センチメートル（三尺三寸五分）、柄約24センチメートル（八寸）
小太刀約55センチメートル（一尺八寸）、柄約14センチメートル（四寸五分）

イ. 太刀とは大刀、小太刀とは小刀のことである。

打太刀、仕太刀、刀を掲げ、立礼をして始める。

打太刀

仕太刀

- ① 立会の間合に進み、上座への礼、相互の礼をしてから、帯刀する。

- ② 互いに右足から大きく三步踏み出して、そんきよ蹲踞しながら刀を抜き合せる。

- ③ 立ち上がって中段の構えとなり、けんせん剣先を下げ、互いに左足から小さく五歩ひき、元の位置に帰る。

- ④ いったん中段の構えになり、次の構えになる。

- ⑤ 小太刀の場合は、太刀に準じて行いが、構えるときは抜き合せると同時に、左手を腰にとり、剣先を下げると同時に左手を下ろす。

補足説明

- ①ア. 立会の間合に進んだ後、まず上座に向かって上体を約30度前に傾けて礼を行い、次に互いの礼は上体を約15度前に傾け相手に注目して行う。
- イ. 鐙に右手親指をかけると同時に左手で鐙こじりを持ち、鐙を腹部中央に送って左手でわけた帯の間に入れる。左手を左帯に送り右手で鐙が臍へその前にくるように刀を帯びる（小太刀も同じ）。
- ウ. 刀を腰に差したとき、左手を鐙元つばもとに添えて親指を鐙にかける。（天覧、台覧の場合の作法については「日本剣道形解説書」を参考にすること。）
- エ. 木刀のときは、体のおおむね中央で左手に持ちかえると同時に、親指を鐙にかけて腰にとり、柄頭が正中線となるようにする。
- オ. 左手親指を鐙にかける要領は、鯉口こいぐちを切ることと、刀を相手から抜かれないようにする心持で、親指の指紋部のところで鐙の上を軽く押さえる。この場合、親指は鐙にかけるが鯉口は切らない。
- ②ア. 打太刀、仕太刀とも足さばきはすべてすり足で行う。
- イ. 左足を右足に引きつけながら蹲踞する。蹲踞はやや右足を前にして右自然体となる程度とする。
- ウ. 抜いてから蹲踞するのではなく、蹲踞しながら横手あたりを交差させて抜き合せる。
- エ. 左斜め上から抜き、極端に振りかぶらないようにする。
- ③ア. ここで言う剣先を下げるとは、構えを解くことである。剣先を下げる要領は、自然に相手の左膝頭から約3～6センチメートル（一、二寸）下、下段の構え程度に右斜め下に下げる。
- イ. このとき剣先は、上から見て相手の体からわずかに外れるくらいにひらき、刃先は左斜め下に向くようにする。
- ウ. 小太刀もこれに準ずる。
- エ. 元の位置とは、立会の間合のことである。
- ④ア. 中段の構えとは、右足を前に、左拳を臍前より約一握り前にして、左手親指の付け根の関節を臍の高さにする。
- イ. 剣先の延長は、両眼の中央または左目とする（一足一刀の間合を前提とする）。
- ウ. 小太刀もこれに準ずる。

-
- ⑤ア. 左手を腰にとる要領は、刀の場合は親指を前にして栗形くりかたの部分を手軽く押さえ、木刀の場合は親指を後ろに四指を前にして腰にとる。
- イ. 左手は体の外側に自然に下ろす。

太刀の形 七本

一本目 相上段から先の ^{きぐらい} 気位で互いに進み、先々の先で仕太刀が勝つ	
打太刀 (諸手 ^{もろて} 左上段)	仕太刀 (諸手 ^{もろて} 右上段)
① 左足を前に出し、諸手左上段に構える。	① 打太刀の動作に合わせて (以下同様なので略) 諸手右上段に構える。
② 前足から三歩で一足一刀の間合に進む。(以下同様なので略)	
③ 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出し、「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。	③ このとき、左足からひいて打太刀の剣先を抜き、右足から踏み出し、「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。
④ 下段のまま送り足で一步ひく。	④ 剣先を顔の中心につける。
⑤ さらに一步ひく。	⑤ 左足を出しながら諸手左上段に振りかぶり残心を示す。
⑥ 上体を起こしながら、下段から上げて中段となる。	⑥ 左足をひいて諸手左上段を下ろし、中段となる。
⑦ 構えを解き、左足から歩み足で五歩ひき、元の位置に帰る。(以下同様なので略)	

補足説明

- ① 左自然体となり、左拳を左額の前上約一握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、やや右に寄せる。
- ③ア. 機とは、相手の「心」と「体」と「術」の変わり際に起こるときの「きざし」である。
イ. この場合、打太刀が仕太刀に勝つ機会を教えているもので、仕太刀の十分になったところを見て打つ。
ウ. 打つとき反動をつけることなく、仕太刀の柄もろともに正面に打ち下ろす気構えが大切である。「打つ」とは「切る」という意味である。
エ. 上体はやや前傾するが、顔だけ上がる姿とはならない。
オ. 目付けは外さない。「目付け」とは、目と目を見合わせる事が原則であるとの理から「目を見る」こととする。
カ. 右足から踏み出すときは左足を伴う。一方の足を移動させたときは原則として他方の足を伴って移動させる。(以下同様なので略)
- ④⑤ア. 送り足でやや前傾のまま二歩ひくことになる。
イ. その時の歩幅は仕太刀との間合によって大小あることに注意する。
ウ. 仕太刀の気位が十分に充ちたときにひくようにする。
- ⑥ 仕太刀が十分に残心を示した後、中段になり始める。
- ① 左拳を額の前上約一握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、正中線上とする。
- ③ア. 自然体でひき、諸手も後ろに引いて剣先方向に抜く。
イ. 抜きと打ちとは一拍子で行い、物打で打つ。
ウ. 左足から右足も伴って後方にひいて抜き、右足から左足を伴って踏み出して打つ。一方の足を移動させたときは原則として他方の足を伴って移動させる。(以下同様なので略)
- ④ア. 十分な気位で打太刀を押しながら行う。
イ. 顔の中心とは両眼の間をいい、剣先を付けるとは剣先の延長のことである。
ウ. 気位とは、鍛錬を積み重ねたことによって得られた自信から生まれる威力、威風のことである。
- ⑤ア. 残心を示すとき、顔の中心を突き刺すような氣勢で押しながら行う。
イ. 残心は一本目から七本目まで形(上段または脇構えなど)の示されている、いない、にかかわらず、十分な気位で相手の反撃に対応できる身構え・気構えで行う。
- ⑦イ. 元の位置に帰った後、いったん中段の構えになり、それぞれ次の構えになる。(以下同様なので略)

二本目 相中段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (中段)

仕太刀 (中段)

① 相中段となり、間合に進む。

② 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出し「ヤー」の掛声で仕太刀の右小手を打つ。

② 左足から左斜め後ろにひくと同時に剣先を下げて抜き、大きく右足から踏み出すと同時に「トー」の掛声で打太刀の右小手を打つ。

③ 中段になりながら、左足から刀を抜き合わせた位置に戻る。

③ 相中段になりながら、右足から刀を抜き合わせた位置に戻る。

④ 元の位置に戻る。

補足説明

- ②ア. 剣先が後方に下がらないよう振りかぶる。
- イ. 大技で仕太刀の右小手の位置よりわずかに低く打つ。
- ウ. 斜め打ちにならないよう一拍子で打つ。
- ③ 刀を抜き合せた位置に戻る動作は、打太刀が先に始める。(四本目、六本目も同様)
- ②ア. 剣先を下げる度合いは、おおむね下段と同じ剣先の高さとする。このとき、剣先を下げながら左後方にひらくので、その軌跡は自然に弧を描くことになる。ことさらに回して半円を描かない。
- イ. 両腕の間から打太刀の身体が見える程度に振りかぶり、斜め打ちにならないよう一拍子の太刀で正しく打つ。
- ③ 形に表さない残心なので、特に十分な残心の気位を示しながら行う。

三 本 目

相下段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (下段)	仕太刀 (下段)
<p>① 相下段に構え、間合に進む。 ② 間合に接したとき、<small>きあらそ</small>気争いで自然に相中段になる。</p>	
<p>③ 機を見て、右足から一步踏み出しながら刃先を少し右に向け、「ヤー」の掛声で仕太刀の水月（みずおち）を諸手で突く。</p> <p>④ 右足を後ろにひくと同時に、仕太刀の刀を物打の右鑓で右に押さえる。</p> <p>⑤ 左足をひくと同時に、物打の左鑓で左に押さえる。</p> <p>⑥ 剣先を下げながら左足から後ろに歩み足で三歩ひく。</p> <p>⑦ 剣先を上げ中段になる。</p> <p>⑧ 右足、左足、右足と出て刀を抜き合わせた位置に戻る。</p>	<p>③ 左足から一步大きく体をひきながら、打太刀の刀身を物打の左鑓<small>しのぎ</small>で軽く入れ突きに<small>な</small>萎やし、右足から踏み出し「トー」の掛声で打太刀の胸部へ突き返す。</p> <p>④ さらに突きの氣勢で左足から踏み出し、<small>くらいづめ</small>位詰に進む。</p> <p>⑤ 三歩位詰に進む。</p> <p>⑥ 剣先を顔の中心につける。</p> <p>⑦ 相中段になりながら左足、右足とひく。</p> <p>⑧ さらに左足、右足、左足とひき、刀を抜き合わせた位置に戻る。</p>
<p>⑨ 元の位置に戻る。</p>	

補足説明

- ① 下段の剣先の高さは、相手の膝頭より約3～6センチメートル下とする。
- ② 気争いとは、双方の先に攻めようとする気の争いのことである。

③ 左鑓ですり込みながら突き、手元が上がらないように注意する。

- ④ア. 仕太刀が突き返したとき、剣先を仕太刀の刀の下から返して、諸手をやや伸ばし左自然体の構えとなり、剣先の延長を仕太刀の咽喉部につけて右に押さえる。
 - イ. 刃先は、わずかに右斜め下に向ける。
 - ウ. 右足のひき方は、注意して正確に行う。
 - エ. 左拳は、正中線から外れない。

- ⑤ア. 剣先を仕太刀の刀の下から回して返し、右自然体の構えになり、剣先の延長を仕太刀の咽喉部につけて左に押さえる。
 - イ. 刃先は、わずかに左斜め下に向ける。

- ⑥ア. 仕太刀の気位に押されて、剣先を下げながらひく。
 - イ. 下げた剣先は、上から見たとき仕太刀の体からやや外れる。

- ⑦ 仕太刀が残心を十分に示した後、剣先を上げ始める。

③ア. 相手の太刀を手元に萎やし入れ、すかさず突き返すことを入れ突きという。

- イ. 体をひかないで手だけでひくと、突き返すときの間合が正確でなくなるので、打太刀の進む程度に応じてひき方に十分注意すること。
- ウ. 打太刀の刀身を萎やす程度は、打太刀の剣先の延長が体を外れるくらいにする。
- エ. 萎やすとき、左拳が正中線から外れないようにし、刃先は右下を向き、突き返すときは真下を向く。
- オ. 突き返すときは、打太刀の突く刀身と仕太刀が萎やし、突き返す刀身の縁が切れないようにする。

- ④ア. 位詰とは、相手に対して優位な体勢を整え、充実した気位で相手を攻め寄せることをいう。
 - イ. 突きの氣勢をもって、左足を踏み出し（二度突きはしない）気位で詰める。

- ⑤⑥ すかさず右足から小足で三步やや早く位詰に進みながら、剣先を胸部から次第に上げ、顔の中心につけ、残心を示す。

- ⑦ 打太刀が剣先を上げ始めると同時に、剣先を下げて中段になりながら左足、右足とひく。

四 本 目 陰陽の構えから互いに進み、仕太刀が後の先で勝つ

打太刀 (八相) <small>はっそう</small>	仕太刀 (脇構え)
① 左足を前に出し、八相に構える。	① 右足を後ろにひき、脇構えになる。
② 間合に進む。	
③ 間合に接したとき、機を見て八相の構えから諸手左上段に変化して、右足から踏み出すと同時に仕太刀の正面を打つ。	③ 脇構えから諸手左上段に変化して、右足から踏み出すと同時に打太刀の正面を打つ。
④ 双方切り結んで相打 <small>あいうち</small> となる。 ⑤ 双方同じ気位で互いの刀身の鑓を削るようにして、自然に相中段となる。	
⑥ 機を見て刃先を少し右に向け右足から進むと同時に、物打の左鑓で巻き押さえてすり込みながら「ヤー」の掛声で仕太刀の右肺を突く。	⑥ 打太刀が巻き押さえてすり込みながら突くはなを、左足を左前に、右足をその後ろに移すと同時に大きく巻き返して「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。
⑦ 相中段になりながら刀を抜き合わせた位置に戻る。	
⑧ 元の位置に戻る。	

補足説明

- ①ア. 構えるときは左足を出し、刀を中段から大きく諸手左上段に振りかぶる気持で構え、刃先は仕太刀に向ける。
- イ. 諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下ろした形で、刀をとる位置は鐙を口の高さにし、口から約一握り離す。
- ウ. 上段に振りかぶってから、八相の構えになるのではない。
- エ. 左拳の位置はほぼ正中線上とし、刀身の傾きは後ろ上方約45度とする。
- オ. 右足先はやや外側に向け、踵が床に着かないように注意する。

- ①ア. 構えるときは右足を後ろにひきながら、刀を中段から右拳がおおむね口の高さを通るくらいに大きく右脇にとり、左半身となる。
- イ. 右足先はやや外側に向け、踵が床に着かないように注意する。
- ウ. 剣先は後ろに、刃先は右斜め下に向け、特に刀身が打太刀から見えないようにする。
- エ. 左拳は、「臍」の右斜め下約一握りのところにおく。このとき、左手首は曲げない。
- オ. 剣先は下段の構えより少し下げた位置にとる。

② 歩幅は、やや小さく三步進む。

- ③ア. 振りかぶる程度は、両腕の間から相手が見えるくらいとする。
- イ. 正面に打ち込むときは諸手を十分に伸ばし、斜め打ちにならないよう真っ直ぐに打ち下ろす
- ウ. 四本目は大技を示したものであるから、大きく伸びるようにするのがよい。そのため間合の取り方に特に注意しなければならない。
- エ. いったん上段をとってから打ち込むのではなく、振りかぶりと打ちとは一拍子で行う。

- ⑤ 相打かいうちになった後、間合が近すぎる場合は、打太刀が左足からひいて間合をとる。

- ⑥ア. 上体はやや前傾する。
- イ. 剣先の高さは水平よりやや低目となり、刃先は右を向く。
- ウ. 目付けを外さず、顔は仕太刀に向ける。

- ⑦ 仕太刀に残心を示させつつ中段になりながら、左足から刀を抜き合せた位置に戻る。

- ⑥ア. 左拳を頭上に上げると同時に、体を左に移し、刃先を後ろにして巻き返す。
- イ. 斜め打ちにならないよう真っ直ぐに大きく振りかぶって打つ。
- ウ. いったん頭上で止めて打つのではなく、巻き返しと打ちとは一拍子で行う。

- ⑦ 二本目と同じように形に表さないで、十分に残心の気位を示しながら、右足から刀を抜き合せた位置に戻る。

五本目

上段と中段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (諸手左上段)	仕太刀 (中段)
① 諸手左上段に構える。	① 剣先を打太刀の左拳につけて中段に構える。
② 間合に進む。	
<p>③④ 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出すと同時に、諸手左上段から「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。</p> <p>⑤ 剣先を上げ、相中段になる。</p> <p>⑥ 左足から小足三步で、刀を抜き合わせた位置に戻る。</p>	<p>③ 左足からひくと同時に、左鑓で打太刀の刀をすり上げ、右足から踏み出すと同時に「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。</p> <p>④ 剣先を顔の中心につけながら、右足からひいて諸手左上段に振りかぶり残心を示す。</p> <p>⑤ 左足をひいて剣先を中段に下ろし、相中段になる。</p> <p>⑥ 右足から小足三步で、刀を抜き合わせた位置に戻る。</p>
⑦ 元の位置に帰る。	

補足説明

- ③④ア. 顎^{あご}まで切り下げる心持で打ち下ろす。
- イ. 仕太刀の刀を目がけて打ち下ろさないようにする。
- ウ. すり上げられたとき、刀は死に太刀となり、構えを解いた程度まで落ちる。
- ⑤ 仕太刀が十分な残心を示した後、剣先を上げ始める。
- ① 左拳（手元）は、やや前に移行して構える。
- ③ア. すり上げは、両腕の間から相手の身体が見える程度に行い、払い面にならないように注意する。
- イ. すり上げは、打太刀の刀を頭上まで十分引きつけて物打の左鑓で行う。
- ウ. 剣先が下がらないようにして、一拍子で正面を打つ。
- ⑤ 打太刀が剣先を上げ始めるので、同時に相中段になる。

六本目 中段と下段から互いに先の気位で進み、仕太刀が後の先で勝つ

打太刀 (中段)	仕太刀 (下段)
① 中段に構える。	① 下段に構える。
② 間合に進む。	
<p>③ 間合に接したとき、仕太刀が剣先を上げ始めるので同時に、剣先を下げ始める。</p> <p>④ 右足をひいて諸手左上段に振りかぶる。</p> <p>⑤ 直ちに左足をひいて中段となり、機を見て「ヤー」の掛声で仕太刀の右小手を小技で打つ。</p> <p>⑥ 剣先を下げて、左足から左斜め後ろに大きくひく。</p>	<p>③ 機を見て剣先を中段に上げ始める。</p> <p>④ 右足から大きく一歩攻め進む。</p> <p>⑤ その刀を、左足を左にひらくと同時に、小さく右鑓ですり上げ、右足を踏み出し、「トー」の掛声で打太刀の右小手を打つ。</p> <p>⑥ 左足を出しながら、諸手左上段に振りかぶり残心を示す。</p>
<p>⑦ 右足から相中段になりながら、刀を抜き合わせた位置に戻る。</p> <p>⑧ 元の位置に戻る。</p>	

補足説明

- ① 仕太刀が下段になっても剣先を下げない。
- ③ア. 下段に応ずる心持ちで剣先を下げる。
イ. 剣先を下げる時、刃先を右斜めにしない。
- ④ 双方の刀が合おうとする瞬間、仕太刀の攻め上げに対して、氣勢を押さえることができないので、上段に振りかぶる。
- ⑤ア. 仕太刀が攻め進むので、直ちに中段になる。
イ. 仕太刀から絶えず攻められるので、小技で右小手を打つ。
- ⑥ア. このときの刃先は、右斜め下を向く。
イ. 剣先は下段よりやや低目の高さまで落とす。
ウ. 仕太刀に正対しないで引く。
-
- ⑦ 仕太刀が十分に残心を示した後、刀を抜き合わせた位置に戻り始める。
- ③ 打太刀の両拳の中心を攻める氣勢で剣先を上げる。
- ④ すかさず中段から剣先の延長を打太刀の上段の左拳につけながら、攻め進む。
- ⑤ア. 仕太刀もこれに応じて中段となる。
イ. 小さく半円を描く心持ちですり上げ、一拍子で正しく右小手を打つ。
ウ. 手の内を利かせて小さく打つ。
エ. すり上げ小手が、払い小手にならないように注意する。
- ⑥ 剣先で攻めながら、残心を示す。
-
- ⑦ 打太刀が動き始めたら、刀を抜き合わせた位置に戻り始める。

七本目 相中段から互いに先の気位で進み、仕太刀が後の先で勝つ

打太刀 (中段)	仕太刀 (中段)
① 相中段となり、間合に進む。	
<p>② 間合に接したとき、機を見て右足から一步軽く踏み出し、諸手で仕太刀の胸部を突く。</p> <p>③④ 相中段になり、左足を踏み出し、右足を踏み出すと同時に体を捨て、「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を諸手で打つ。</p> <p>⑤ 上体を起こして刀を大きく振りかぶりながら、右足を軸にして左足を後ろにひき、仕太刀に正対して剣先を中段の程度につける。</p> <p>⑥ 左足から後ろにひき、相中段になる。</p>	<p>② 左足から体を後ろにひくと同時に、諸手を伸ばし、物打の左鑢で打太刀の刀を支える。</p> <p>③ 相中段になり、右足を右前にひらき、左足を踏み出して体をすれ違いながら「トー」の掛声で打太刀の右胴を諸手で打ち、右足を踏み出して左足の右斜め前に軽く右膝をつく。</p> <p>④ 脇構えに構えて、残心を示す。</p> <p>⑤ 同時に、その体勢から刀を振りかぶりながら、左に向きを変えて打太刀に正対し、剣先を中段の程度につける。</p> <p>⑥ 右足を踏み出して立ち上がり、相中段になる。</p>
<p>⑦ 互いに縁が切れないようにして、左足から刀を抜き合わせた位置に戻る。</p> <p>⑧ 七本目の場合は、いったん太刀の形が終わるので、蹲踞して互いに刀を納めて元の位置に帰り、立礼する。</p>	

太刀の形から小太刀の形へ移る場合の所作

打太刀	仕太刀
① 蹲踞して待つ。	① 小太刀に取りかえる。

補足説明

- ②ア. このとき、氣勢を込め、刃先をやや右斜め下に向けて、鎧ですり込みながら胸部を正しく突く（気当り）。
イ. 気当りとは、相手を「打つぞ」「突くぞ」という気持で攻め、相手の心の反応を見たり、動きを予知したりすることである。
- ③④ア. 左足を踏み出しながら振りかぶり、右足を踏み出して捨て身で打ち込むので、体はやや大きく前傾する。
イ. このとき、打太刀の目付けは離れるが、打ち終わって直ちに仕太刀に向ける。
ウ. 斜め前に出て打たないように、真っ直ぐ前に出て打つ。
- ⑤ いったん、脇構えになってから振りかぶるのではなく、体を起こしながら振りかぶる。
- ⑥ 剣先を交えた後、仕太刀を引き起こす気持で縁を切らず左足から後ろにひく。
- ②ア. 打太刀の進む程度に応じて体をひき、刃先を左斜め下に向け相突きの氣勢で支え、そのときの気位は双方五分である。
イ. 双方の剣先はやや上がり、交差した物打の高さはおおむね肩の高さとする。
- ③ア. 右足をひらくとき、上体は移動しない。
イ. 左足は右前に踏み出す。
ウ. すれ違いながら胴を打つとき、仕太刀の体は変化するが、目付けは相手から離さないようにする。
エ. 諸手は十分に伸ばし、刀と手はほぼ平行（右腕の延長上）に右斜め前にとり、刃先は右に向ける。
オ. このとき、右爪先を立て、左膝を立てる。
- ④ その後、節度をつけて刀を返し脇にとり、残心を示す。
- ⑤ このとき、右膝を軸にして、右足を右に移して打太刀に正対する。
- ⑥ 打太刀の動きと縁を切らずに応じて、十分な氣勢で右足を踏み出して立ち上がる。
-
- ⑦ア. 歩み足で刀を抜き合わせた位置に戻る。
イ. 刀を抜き合わせた位置に戻るよう注意する。
- ⑧ア. 蹲踞して納刀の後、立ち上がる。
イ. 元の位置に帰った後、腰から刀を脱し右手に持って掲げる。木刀の場合は、体の中央で左手から右手に移し、両手を自然に掲げ立礼をする。
ウ. 腰から刀を脱する要領は、左手で刀をわずか右前に押し出ししながら、右手を左手の内側に送る。右手の人指し指を鐙に掛けて、残り四指で鯉口近くを握る。左手を左帯に送り、右肘を伸ばして、脱刀する。
- ①ア. つづいて小太刀の形を行う場合、仕太刀が小太刀に取りかえる間、蹲踞して待つ。
イ. このとき、太刀を右手に持ったままで、柄頭を内にして右腿に置く。
ウ. 仕太刀が元の位置に戻り始めた頃に、立ち上がる。
- ① 後退りに小太刀の置いてある位置に移動し、下座側の膝をついて太刀を置き、小太刀を持ち、立ち上がって立会の間合に戻る。

小太刀の形 三本 (打太刀…太刀、仕太刀…小太刀)

一本目	
打太刀 (諸手左上段)	仕太刀 (中段 ^{はんみ} 半身)
① 左足を前に出し、諸手左上段に構える。	① 中段半身に構える。
② 間合に進む。	
③④⑤ 間合に接したとき、仕太刀が入身になろうとするので、右足から踏み出し、「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。	③ ^{いりみ} 入身になろうとする。 ④ 右足から右斜め前に体を進めて、右にひらくと同時に左鑓で受け流し、「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。 ⑤ 左足から一歩ひいて上段にとって残心を示す。
⑥ いったんその場で相中段になって後、互いに左足から刀を抜き合わせた位置に戻る。 ⑦ 構えを解いて、元の位置に戻る。	

補足説明

- ① 上段に対する中段半身の構えは、右足をやや前に出し左肩を引き、剣先は打太刀の顔の中心の高さにとり、やや高く構える。

② 互いに前足から三步で間合に進む。

- ③ 諸手左上段から反動をつけることなく、正しく仕太刀の正面に打ち下ろす。

- ④ 目付けを外さず、顔を仕太刀に向ける。

- ③ア. 入身とは、氣勢を充実して、相手の手元に飛び込んでゆく状態をいう。

イ. 「入身になろうとするので」ということから形に表さない。

- ④ア. 右手を頭上に上げ、刃先を後ろにし、左鑓で受け流す。

イ. 受け流しは、手の内を柔軟にして正しく行う。

ウ. 右足から右斜め前に体をひらくとき、体がひらき過ぎないように気をつける。

- ⑤ア. 上段をとるとき、剣先を顔の中心につける必要はない。

イ. 確実に正面を打ってから残心を示し、反射的にとらない。

ウ. 右拳は額の前上とし、剣先は約45度後ろ上方に向ける。

⑥ 小太刀の一本目だけ、その場で相中段になる。

- ⑦ 小太刀の構えの解き方は、左手を左腰から下ろし、剣先は相手の体からわずかに外れるように下げ、刃先は左斜め下に向ける。

二 本 目

打太刀 (下段)	仕太刀 (中段半身)
① 下段に構える。	① 中段半身に構える。
② 間合に進む。	
③ 間合に接したとき、下段から中段になろうとする。 ④ 右足を後ろにひいて脇構えにひらく。 ⑤⑥ 脇構えから変化して諸手左上段にかぶり、右足から踏み出すと同時に「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。	③ 打太刀の刀を制して入身になろうとする。 ④ すかさず、再び中段で入身になって攻め込む。 ⑤ 左足から左斜め前に、右足をその後ろに進めながら体を左にひらくと同時に右鎧で受け流し、体を転じて「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。 ⑥ 打太刀の二の腕を押さえて残心を示す。
⑦ 打太刀は左足から、仕太刀は右足から相中段になりながら刀を抜き合わせた位置に戻る。 ⑧ 元の位置に帰る。	

補足説明

- ③ これは守る意味である。
- ④ 大きくとらないで、剣先を素早く右斜め下にして、脇にとる。
- ⑤⑥ア. 上段に振りかぶる程度は、両腕の間から相手の体が見えるくらいである。
 - イ. 斜め打ちにならないように打ち込む。
 - ウ. 脇から、上段、打ち込みの動作は、一連のつながった動作として変化する。
 - エ. 目付けを外さず、顔を仕太刀に向ける。
- ① 下段に対する中段半身の構えは、右足をやや前に出し左肩を引き、剣先は打太刀の胸の高さにとり、やや低く構える。
- ③④ア. 下段から中段になろうとする瞬間、制して入身になるときの刃先は、斜め右から下へと変化する。
 - イ. 右足から一歩進み、剣先を咽喉の高さにして中段となり攻め込む。
- ⑤ア. 右手を頭上に上げ、刃先を後ろにし、右鑓で受け流す。
 - イ. 確実に面を打ち、決めてから残心の所作に移る。
- ⑥ア. 残心のとき、関節よりやや上部を上から押さえて、腕の自由を制すると同時に、右拳を右腰にとり、刃先を右斜め下に向け、剣先の延長を咽喉部につける（三本目も同じ）。
 - イ. 残心をとるとき、ことさらに体を進めて接近しないようにする。

三 本 目

打太刀 (中段)	仕太刀 (下段半身)
<p>① 中段に構える。</p> <p>② 右足、左足と出て間合に進む。</p> <p>③ 次の右足を踏み出すとき、仕太刀が入身になろうとするので中段から諸手右上段に振りかぶって、「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。</p> <p>④ 直ちに左足を踏み出し、仕太刀の右胴を打つ。</p>	<p>① 下段半身に構える。</p> <p>② 下段半身のまま、右足から間合に進み、入身になろうとする。</p> <p>③ 打太刀の刀をいったんすり上げて、左斜め前下方向にすり落とす。</p> <p>④ 左足を左斜め前に踏み出し、体を右斜めにひらくと同時に、胴に打ってくる刀を左鑓ですり流し、「トー」の掛声で、そのまま左鑓で打太刀の鑓元にすり込み、小太刀の刃部の鑓<small>はばき</small>で打太刀の鑓元を押さえて、入身になり、打太刀の二の腕を押さえる。</p>
<p>⑤ 左斜め後方に右足、左足、右足と歩み足でひく。</p>	<p>⑤ 左足、右足、左足と歩み足で三步攻め進み、残心を示す。</p>
<p>⑥ 打太刀は右足から、仕太刀は左足から相中段になりながら、刀を抜き合わせた位置に戻る。</p> <p>⑦ 蹲踞して互いに刀を納めて元の位置に帰り、相互の礼の後、上座への礼をして終わる。</p>	

立 会 後 の 作 法

打太刀	仕太刀
<p>① 座礼の位置に行く。</p>	<p>① 太刀、小太刀を持って座礼の位置に行く。</p>
<p>② 座礼をした後、退場する。</p>	

補足説明

① 下段に対して、剣先は下げない。

① 下段半身の構えは、右足をやや前に出し左肩を引き、剣先の高さは太刀の下段の高さに準ずる。

③ア. 入身になろうとするのを正面に打ち下ろされるので、この刀を左鑷ですり上げて、すり落とす。

イ. 仕太刀の剣先は、打太刀の体からやや外れる。

④ア. 手首を柔らかくして、すり落とした位置からは、右拳が高く上がらないように横一文字に腹部の前を移行して右に運び、すり流す。

イ. 左足を左斜め前に踏み出すと同時に体を右に転じ、左鑷ですり流す。

ウ. 仕太刀の鑿元が、打太刀の鑿元と接するようにして押さえながらすり込み、刃先を前下にして手首を起こす。

エ. すり込み終わったとき、仕太刀の鍔は打太刀の鍔に直角になる。

オ. 小太刀と太刀とは、おおむね十文字に交差させる。

カ. 関節よりやや上部を、やや横より押さえ、腕の自由を制する。

① 後退りに太刀の置いてある位置に移動し、下座側の膝をついて太刀をあわせ持ち、立ち上がって座礼の位置に行く。

② 互いに向い合って座り、座礼をし、刀を持って立ち上がり、仕太刀は打太刀の進路をあげ、打太刀にしたがって退場する。